



年 組 名前

A

デフリンピック

「聞こえぬ」競技の魅力

聴覚障害者の国際スポーツ大会「デフリンピック」が15、26日、東京を主会場に開かれる。日本では初開催だ。80カ国・地域から選手約3千人が出場し、陸上やサッカー、柔道など21競技で熱戦を繰り広げる。

選手はチームの仲間と手話やアイコンタクトで連携し、陸上や水泳のスタート合図はランプが使われるなど視覚情報でプレーする。普段、補聴器を使う選手も試合中は外す必要がある。聞こえないと打球音やかけ声などの情報が得られないほか、平衡感覚の維持にも影響が及ぶ。そのハンディを補うための観察力や判断力、仲間との信頼関係はより重要となる。デフリンピックならではの魅力や奥深さがここにある。

大会は聞こえない、聞こえにくい人の暮らしや文化への理解を深める機会にもなる。共生社

会の実現につなげていきたい。デフリンピックは1924年、パリで前身の大会が開かれたのが始まりだ。欧州では当時、すでにろう者の競技団体が活動しており、同じ年のパリ五輪に影響を受けたとされる。

48年に始まったパラリンピックより歴史は古い。パラが第2次世界大戦で負傷した兵士の治療や社会復帰の一環で始まったのに対し、デフリンピックはろう者による主体的なスポーツ振興の側面が強いと言える。

五輪と同様、4年に1度開かれルールもほぼ変わらない。デフリンピックと五輪の両方に出場した選手もいる。

日本選手は約270人が出場する。前回の30個を上回るメダル獲得が目標だ。北海道関係選手も13人がエントリーした。白熱のプレーを見せてほしい。

卓球女子の木村亜美選手は札

幌の企業に所属している。2年前の世界ろう者選手権で女子ダブルスなど2冠に輝いた。今大会は4種目に出場する予定だ。バドミントンでは小樽市出身の沼倉昌明選手が、妻の千紘選手と混合ダブルスに出場する。

2年前に長男が誕生し、子育てと練習を夫婦で両立してきた。100年の歴史があるが、これまで日本では認知度不足や資金難などが開催の壁だった。

今大会は3千人超のボランティアや手話通訳者が参加し、協賛企業・団体は160に上った。一定の広がりはあるが、民間調査によるとデフリンピックの認知度は4割弱にとどまる。

大会は手話の普及を促進するなど社会的意義が大きい。選手を応援しもり立てていきたい。重要なのは一過性で終わらせず、誰もが住みやすい社会を追求し続けていくことである。

2025年11月13日(木) 朝刊 全道版 7ページ

B

卓上四季

2025. 11. 15

「位置について」「用意」「スタート」。陸上競技や運動会でおなじみの3ステップだ。号砲を鳴らすスターターの合図とともに選手は集中していく▼聴覚

障害のある選手はこの流れに反応するのが難しい。東京のろう学校教諭の竹見昌久さんの生徒もそうだった。短距離走のスタートで遅れ、悔し涙を流す▼十数年前のこのできごとをきっかけに竹見さんは新しい装置を考案する。3ステップをそれぞれ赤、黄、緑の光で示すスタートランプ。いわば「光の号砲」である。メーカーと改良を重ね、すっかり定着した。東京新聞が先ごろ報じていた▼世界の聴覚障害者が競うスポーツの祭典「デフリンピック東京大会」がきょう開幕する。80カ国・地域から3千人ほどが集まり、21の競技に出場する。1世紀に及ぶ大会の歴史で日本開催は初めてだ▼競技のルールは五輪とほぼ同じだが、この大会ならではの見どころが多くある。例えば目配せや独自のサインで意思を伝える団体競技。竹見さんが考えたランプも陸上競技で使われる。音のない世界を想像しながら声援を送りたい▼大会エンブレムは手をモチーフとし、親指の先からサクラが花開く意匠である。耳が聞こえる人も聞こえない人も互いに理解を深め、だれもが暮らしやすい世の中をつくる。その先には笑顔の花が咲くに違いない。

2025年11月15日(土) 朝刊 全道版 1ページ



年 組 名前

道新で ワークシート

(1)「デフリンピック」について記事を読んでわかったことを五つ書きなさい。

-
-
-
-
-

(2) 記事Bにしかない情報を書きなさい。

(3) 北海道にゆかりのある選手一人の名前を書きなさい。

(4)「デフリンピック」のことを知らない人に、「デフリンピック」のことを伝えるときには、
あなたならどちらの記事を読んでももらいますか？ 理由とともに答えなさい。

●選んだ記事（ A ・ B ）

●理由